

家も僕も冗談言う余裕ない

うどんを最後の食事として食べたが、この後が大変、和室の大掃除である。僕は途中抜けて、鈴木に自転車借りて、北野へバスの定期を買いにゆく。

ちょっと大げさだが、足が重くて、自転車もろくろく進まない。

三時五十三分のバスに乗って帰宅。

雨が降ってたが、電車を降りたらやんでた。

雨で洗われた観月橋とそのまわりの宇治川はしっとりしてきれい。

もう、春だ。

僕は真っ黒（実は焦げ茶だが）な顔で家に入ると、まず、幹夫がニヤリと笑って、

「あれ、兄ちゃん、まだ生きてたんか。」とのご挨拶。

お父ちゃんとお母ちゃんは、相変わらず、口げんかで、どなり合っていた。

雑談して、六時にめし、その後テレビで、八時には疲れて寝込む。

今日は、「四月ばか」だそうだが、なにか大きな嘘をひとつ言おうと思ったが、結局、その種なしで、言えずじまい。

家も僕も冗談言う余裕ない。